

〔比古婆衣三〕建内宿禰の名の唱

建内宿禰の名は、兄を味師ウシノス内宿禰ウチノスと稱へる味師に對へたる美稱にて、多タ祁志ケシ宇智ウチ宿禰スネと稱ひしなるべし、其はまづ古事記に、兄の名を味師とあるを、書紀には甘美と書き、姓氏錄には味と一字に書るをおもふに、宇麻志の志は、甘美の活言なる事著し、弟の名も同じさまに相對へて、多祁志と唱へるに、建字を當て書るなり、書紀などに武字を書るも同じ、かくて其兄弟の名の味、建、といふに、内の宿禰と引合せて呼べるなり、古事記仁徳天皇の御歌に、建内宿禰の事を、宇智能阿曾ウチノアツとよみ給ひ、神功紀に見えたる、熊之凝が、御軍人に向ひて唱へる歌にも、于地能阿曾ウチノアツといへるをも證とすべし、

〔比古婆衣三〕倭建命の御名の唱

倭建命の御名、ヤマトタケルと稱し奉たりしなるべし、其は古事記に、此命熊襲建兄弟を殺し給ふ時、○註 弟建が言に、於西方除吾二人、無建強人、然於大倭國、益吾二人、而建男者坐祁里、是以吾獻御名、自今以後、應稱倭建御子云々、故自其時稱御名謂倭建命云々、○註 と見えたるによりて知られたり、○中 さて此皇子の御名、書紀に日本武、また餘古書どもに倭武とも書きて、その武字は、例にタケ、またタケシなどこそは訓め、タケルとはよむまじきがごと思ふ人もあるべけれど、書紀に梟帥と書るを、既く古事記に、建字を用ひられたるにも准へざるべく、また猛字も武字と同じ義として、つねにタケ、またタケシなどよめど、書紀に五十猛神イタケノカミと書るなど、おもひ合すべし、さて又タケルてふ稱の義は、記傳に、威勢ありて、猛き者を云ふ稱なりと説はれたるがごとし、○中 さて景行紀四十三年、此命の崩給へる處に、日本武尊、化白鳥云々、因欲録功名、即定武部也、と見えたる武部を、古訓にタケルべとあり、又出雲風土記に、出雲郷、所以號健部者、纏向檜代宮御宇天皇、○景 行勅、不忘朕御子倭健命御名、健部定給、爾時神門臣古禰、健部定給、即健部臣等、自古至今、猶居此處、